

子に結合した有機物が大部分を占めたが、黒ボク土の場合、シルト（20 $\mu$ m）および砂（20 $\mu$ m以上）の粒径区分に含まれる有機物の割合が多かった。有機物を除去した土壌粒子の粒径分布と比較しても、有機物を除去していない土壌の粒径分布はさらに大きな粒径の側にシフトしていた。

また、埋没した古い年代の黒ボク土では、砂以上の大きさの有機・無機複合体の割合がさらに大きかった。

これは、黒ボク土では土壌粒子が有機物を介して互いに結合し、年代を経るに伴って土壌粒子間の

結合力が増大し、より大きなサイズの安定な有機・無機複合体になると



カシワの木の切株(2019年9月、帯広市内)

して説明することができ

### 林を里山として維持

他方、微粒炭の多くはシルト以上の大きさを持

つため、黒ボク土の有機

物分布が砂やシルトなどの大きな粒子の側にあることの説明として適しているが、年代を経るに伴って大きな粒子の割合

が増えることの説明は困難である。

十勝平野の台地上にはかつて広大なカシワ・ミズナラ林が分布していた。そして、そこに分布する土壌は黒ボク土であ

る。黒ボク土が草原植生のもとに生成したという

考え方と矛盾するように考えるが、カシワ・ミズナラ林の主な林床植生はササである。カシワ・ミズナラは厚



切株からのひこばえ2019年5月、帯広市内)